「１４歳からの哲学」を読んで

先に当ＨＰでフランスの高校生向きの哲学の教科書の読後感（「雑学」バックナンバーサイト書籍等読後感関係（Ⅱ）Ｐ 2005.03.11. 「『哲学する』って、どういうこと？ 」：参照 ）に記したように、哲学するって、どういうことか、今一自分なりに理解出来なかった。

不器用な性格故か、気になり出すと知りたくなる。そうした折、新聞で書籍「１４歳からの哲学－考えるための教科書－」が目に止まり、日本人の著者による中学生向きなら、この自分には少しは解り易いかなと購読した。

確かに文章としては読み易かったし、哲学するってどういうことかは、少しは知ることはできたような気がする。でも、著者曰く、哲学するって「考えて、知る」ことであって、「読んで覚えることでない」という。あ～ぁ、自分はまだまだダメか……。

著者によれば「自分の思っていることことが正しいことなのかどうか、常に『考える』ということをすること」で、「考えるということは、多くの人が当たり前と思って認めている前提についてこそ考えることである」という。また、「生きることを権利と決めている法律はあるけど、生きることを義務と決めている法律はなく、だから人は『生きなければならない』ではなく、『生きたい』というべきであり、そして『何のために生きるのだろう』と考えるということは、ある意味で、自分との対話、ひたすら自分と語り合うことだ。」という。

本を読んで、「何か答えが書いてあると期待して読んだのなら、肩すかしをくらったと思うだろう。でも、もし肩すかしをくらったと思ったのなら、それこそが始まりなんだ。君は、わからないということが解ったのだからだ。全然わけがわからなくなりましたって言うなら、君、大成功だよ。わからなくなったからこそ、これから考えられるんだ。」ということのようなので、本を読んでも「生きる」ということがよくわからなかったということを知っただけでもいいのかなぁ～。

そういえば、「無知を知るは知なり」、「我思うに我あり」という言葉もあったっけなぁ～。

「生きるとはどういうことか」は、有史以来人類の永遠の謎への問いのよう。確かに、この瞬間を「生きている」と感じ、「どう生きるか」を考えるのは、この自分以外の何者でもないか…。なら、自分の謎への冒険者でありたいとも思う。

（2005 年 4 月 20 日　記）